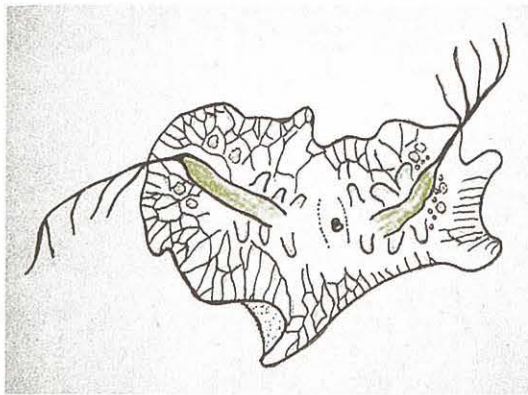


コマイクラゲムシ



ハ放サンゴ類に共生するコマイクラゲムシ
(Utinomi 1
963改写)

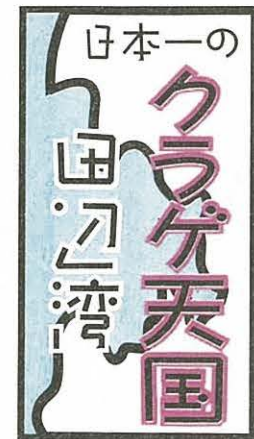
コマイクラゲムシは、海底で付着生活するソフトコーラルの体表で暮らしている。樹状のハ放サンゴ類のポリプ個虫の間から、2本の櫛(くし)のような触手を長く伸ばし、

餌が掛かるのを待ち構えている。獲物は微小な生物。攻撃するための刺胞がないため、触手にぎっしり詰めた鳥もちのような器官「膠胞(こうほう)」で獲物を絡め取る。

また、体の背面のど真ん中に1個の感覚器があり、行動を制御している。

久保田 信

78



コマイクラゲムシは小型で、体長4〜15mmほどしかなく、薄っぺらな体をしている。体は無色透明だが、触手を収める鞘(さや)だけは黄色みを帯びる。鞘の根元付近に3対ずつ計12個の小さな突起があるのが特徴である。

コマイクラゲムシは、1963年、京都大学瀬戸臨海実験所の内海富士夫先生によって新種登録された。初代所長の駒井卓先生の名前を記念して冠している。田辺湾にも生息するが、昭和天皇が相模湾の葉山沖で発見し、多数のホルマリン固定標本を残しており、これらを調べた結果の新種となった。

コマイクラゲムシは、親子で全く体のつくりが違っている。子どものはごく普通の姿のクシクラゲの形をしている。発育が進むにつれ、不思議なことに櫛板をすっかり落とし、薄っぺらな体になって海底に沈む。

プランクトンからベントスへと劇的な変化を遂げるわけである。これは進化の過程でたどってきた姿であり、コマイクラゲムシの一生をつぶさに観察することで、大昔の姿を推測することができる。

(京都大学准教授)